

北方謙三

角川文庫

過去

リタバ

かこ
過去
リメンバー

きたかたけんぞう
北方謙三



角川文庫 6260

昭和六十年十月二十五日 初版発行

平成三年六月三十日 十四版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三八一七—八四五—
営業部(〇三)三八一七—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——大日本印刷 製本所——本間製本

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社通信販売課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

過去

リメンバー

北方謙三



角川文庫 6260

1 刑 事

久しぶりだった。

背中に貼りついた視線。後頭部のあたりが熱くなるような感覚。気のせいではない。雑踏に紛れこみ、早足で歩いてても、蠅はえのようにしつこくまとわりついてくる。

走ろうか。ふと思った。五年前なら、思う前に走っていた。躰からだの方から、動き出していた。走らないのは、歳のせいではない。誰が、なぜ。それを確かめたい気持の方が強い。

スクランブル交差点。信号が変わるのを待っている群衆の中に入りこむ。視線は、相変らず背中に突き刺さってくる。ふりむきたい衝動を、私はかろうじて抑えた。

群衆が動きはじめた。私は、その流れの中に身を任せた。渡りきった舗道のところで、ちよっと立ち止まる。背中に肩がぶつかってきた。ただ、ぶつかってきただけだ。害意は感じられない。それでも、私は驚いたような仕草を作ってふりむいた。無数の人の顔が眼にとびこんでくる。私に突き刺さってくる視線を、辿たどることはできなかった。どうも、とぶつかってきた男が言う。

私は、キャバレーの客引きが横行している、人通りの多い道に入った。近づいてくるはず

だ。こんな道での尾行は、距離をとると危険すぎる。いくつも路地があるし、酒場の扉も並んでいる。姿をくらますには、絶好の場所だ。足を速めた。近づいてきた客引きと絡むようにして、路地に滑りこんだ。

そのまま、路地の入口のところで、壁を背にして立っていた。数秒。思った以上に距離をとっていたのか。あるいは、ほんとうに私の姿を見失ってしまったのか。さらに数秒待った。見失ったか、それともこちらの動きを読まれてしまったか。どちらでもいい。私は、ゆっくりと通りの方へ踏み出した。

村尾が、人波の中に突っ立っていた。当然のように、私を見つめている。私も見つめ返した。どちらがしてやられたわけでもなさそうだ。

「いつから、気がついてた？」

「なにをだね？」

「俺が尾行^{つけ}してたことさ」

「ほう、私を尾行^{つけ}してたのか？」

村尾はひとりだった。私と並んで立ち、なんとなく歩きはじめた。人波の中で、立話は難しい。私は煙草に火をつけた。

「四年ぶりになるのかな」

「よく、俺を憶えててくれたよ」

「一年間、あれほどしつこく貼りつかれてたんじゃね」

「刑事と友達^{ダチ}の顔はすぐ忘れちゃうのかと思ってた」

「刑事^{でか}の顔は忘れたいと思うよ。特に、君のような男の顔はな」

「知ってる酒場^{みせ}、あるか？」

「君の給料の半月分が消えちまうような店ならな。しかも割勘でだ」

「喫茶店にするか」

まだ八時を回ったばかりだった。

「コーヒーはやめてるんだ」

「どこかで、折合いをつけてくれんか？」

「刑事と折合いがつく場所なんて、あるのかね？」

「おでん屋か焼鳥屋か留置場」

はじめて、村尾がにやりと笑った。四年という歳月がもっと長く感じられるほど、老^ふけている。四年前は、まだ三十代の終りだった。

「相変らず、所轄^{でか}の刑事部屋かね？」

「はみ出し者^{もん}を本庁に呼び戻すほど、警察は甘かねえな」

かつて、村尾は本庁捜査一課の部長刑事だった。そのことは、噂^{うわさ}として知っているだけだ。なぜ本庁から所轄に回されたのかは、いく通りもの噂があった。

私は、どこかに入ろうという気持ちになりかかっていた。自分のしたい話をするまで、村尾は私から離れはしないだろう。それに、ひとりだ。正式の仕事というわけではなさそうだった。

村尾が、路地の奥を指さした。焼鳥屋の提灯が出ていた。

「なにがあつたんだよ、おい？」

焼鳥屋に、客の姿はまばらだった。隅の椅子に腰を降ろし、私はモツ焼きとビールを二本頼んだ。おしぼりで顔を拭った村尾が、視線を真直ぐにむけてくる。

「なにがあつた？」

「交通事故を見たよ。三日前だったかな」

「変らんね、そのとぼけ方は」

ビールが運ばれてきた。お互いに一本ずつ取り、自分のグラスに注いだ。

「川口が弱気になる理由ってのは、どう考えてもあんたしかないんだがな」

「五年以上、あの男とは会ってない。音信もない。知ってるはずだろう」

私はビールをのどに流しこんだ。村尾の口から、川口の名前が出ることは予想していた。ただ、意外なかたちで出てきた。

「やたらと、人に会いたがつてるそうだ。手紙も何本か書いたようだしな」

「私は受け取ってないよ。もっとも、あの男が私に手紙を書くとも思えんが」

「あんたと、小畑には、出しとらんよ」

「刑務所なからの手紙は、宛名人だけじゃなく内容も調べるんだらう？」

「そこまで、俺は知らん。ただ、自分の女以外には、五年間誰とも会わず、手紙一本書かなかった男が、なぜか人と会いたがってる。刑務所なでも、同房の連中とよく喋しゃべったりするらしい」

あと二年。うまくすれば、一年半に縮まるかもしれない。それだけの時間が耐えられないなにかが、川口の中で起きたのか。

私はビールを注いだ。運ばれてきたモツ焼きには手を出さなかった。

「人を恋しがる。弱気になった証拠さ」

「その理由が、なぜ私なんだ？」

「あんたの裏切り。それが川口にや一番こたえることじゃないのか？」

「川口が、そう言ったか？」

「しよぼくれた、刑事でのカンだよ」

村尾が、モツ焼きをくわえ、串を横に引いた。裏切ろうにも、私には裏切りようがなかった。それは川口が一番よくわかっているはずだ。川口の心に波を立てるようなことも、やっていない。五年。考えてみれば、長い歳月だ。私はもう、五十に手が届こうとしている。それでも、一度も仕事ヤマは踏まなかった。三人のうちひとりでも懲役に行くことがあれば、静か

に出所を待つ。約束だった。七年も食らったのは、川口の勝手な行動のせいだ。

それでも、約束は約束だった。

「小畑も、尾行回してみたのかね？」

「あいつは、あんたが動かんかぎり、動きやせんだろう。ひとりで動く男じゃない。店の方も、うまくいつてるようだしな」

「ほう」

「娑婆しゃばにいる二人も、会ってないなんて言うんじゃあるまいな」

「三年前だったかな、一度会ったよ。小畑は店をはじめたばかりでね」

「勝手にしろ。俺やまたあんたに貼りつくぞ」

「いつまでも、我慢するタイプだとは思わんでくれよ。それに、君から手帳を取りあげるようなことはしたくないしな」

泡がすっかり消えたビールを、私は呷あおった。あと二年。二年待てばいいのだ。

煙草をくわえ、煙を吐くと、村尾が掌で払うような仕草をした。そういえば、四年前までの村尾は、のべつまくなしに両切のピースをくわえていたものだ。

「禁煙したのか？」

「胃に穴があいちまってね。二年前に手術して、三分の二も取っちゃったんだ。その時、やめたね。喫すいたくもなくなった」

「癌かな？」

「冗談でも、そんな言い草はやめてもらいたいね。胃潰瘍、医者はそう言った」

「医者は、か」

村尾が、いやな顔をした。本気で癌の心配をしているのかもしれない。それが不思議ではない年齢になっている。

「あんた、元気そうだよ」

「商売は、うまくいってるんでね」

「あんたら、三人とも犯罪者の臭いがせんな。いやらしいほど紳士面してやがる。俺にやそれが気に障ってな。そんな顔して、やってることは下種だ」

「刑事なら、証拠に基づいて言うもんだよ。川口は別として、私も小畑も、犯罪と名のつくものには縁がなかった。これから、多分ないだろう」

「なにかが動いてた。そいつはわかってんだ。ボスがあんたなのか川口なのかは知らん。確かに、なにかが動いちゃいたんだ」

警察で、私や小畑に眼をつけているのは、間違いなく村尾ひとりだろう。五年前、一年間徹底的に貼りつかれた。最初は二人だったのが、二週間で村尾ひとりになった。終ったな、私はそう思った。しかし村尾は諦めなかった。この男の、嗅覚は間違っていない。ただ、川口がやったことと私たちを絡めて考えすぎた。川口は、自分のために、ひとりだけでやった

のだ。そのことで、逮捕^{あづ}られたのだ。

煙草を消した。ビールの残りを飲み干す。二人分のモツ焼きは、結局、村尾ひとりで平らげていた。いくらだ、と私は店の女の子に言った。村尾も、慌^{あわ}てて財布を取り出した。

客がひと組しかいなかった。

カウンターの私の席はあいていた。私がカウンターの端を自分の席だと決めているだけで、混んでいる時は無論そこもふさがっている。

ワイルド・ターキーのボトルとグラスが置かれた。綾子はボックスで客の相手をしている。十二時十分前。三人いる女の子のうちの二人は、そろそろ帰る時刻だ。

「オン・ザ・ロックにいたしましょうか？」

バーテンの在沢が声をかけてくる。四回に一度くらい、私はオン・ザ・ロックを飲む。取り立てて理由はない。

「いくつになった？」

「は？」

「君とは、ずいぶん長く付き合ってるような気がするね」

「二十七でございます」

ちよっと、在沢が笑った。若いくせに大人びた男だ。バーテンとしての眼配りもいい。地

方出身だが六本木^{ろっぽんぎ}に十年も暮していて、悪さだけは人一倍やってきたらしい。『カリブ』開店以来、カウンターの中に立っている。

「三年半か」

綾子がこの店を開いたのは、二十九になったばかりの時だった。あのころも、在沢は同じように丁寧な言葉遣いをしていた。

私がストリートグラスにワイルド・ターキーを注ぐのを見てから、在沢は氷の浮いた水を私の前に置いた。女の子が二人、いつの間にか消えていた。客に、終電車の時間を思い出させるような帰り方はしない。

「どうかしたの？」

綾子がそばへ来た。在沢がボータイに手をやり、私たちの前から離れた。綾子と私の関係を知っているのは、多分在沢だけだ。

「なにか変かね？」

「飲み方が、いつもとちがうわ」

「どこが？」

「グラスを出されて、注ぐまでの時間。グラスの持ち方。最初のひと口の量。いつも判で押したみたいに同じなのに」

綾子が、白い歯を見せて笑った。化粧は薄い。三十を越えても、肌の衰えはまったくない

ように見える。

私は、ちょっと意識してグラスに手を伸ばし、残りのウイスキーを呷った。やはりどこかで、村尾に会ったことがひっかかっているのだろうか。貼りつかれたところで、なにも掴ま^{つか}れはしないはずだ。川口のこと、別に気になりはしない。それでも、どこかにひっかかっている。

「明日、一緒に行ってくれませんか？」

いま住んでいる代官山のマンションから、綾子は六本木に引越そうとしていた。歩いて店に通える場所が便利なのは確かだった。この一週間、六本木のマンションを見て回っていたはずだ。どうでもいいようなものだが、私が気に入るということが、第一の条件になっていた。一緒に暮すわけではない。それにどんな場所でも、私は大抵耐えられる。

「二時ごろでいいんだね？」

「新しくする家具も、一緒に見てくれる？」

「好きなようにしていいんだよ。私が家賃を払うからといって、気にすることはない」

「そういうもんじゃないでしょう。お部屋に来てもらうわけだから」

「家具を見て、食事をして、店にちょうどいい時間かな」

綾子が笑った。私は、ワールド・ターキーをグラスに八分目注いだ。いつも、きっちりとそこまでしか注がない。

2 手紙

私の部屋に手紙が舞いこむのは、めずらしいことだった。大抵の郵便物は、事務所の私のデスクに届けられる。

薄っぺらな封書で、字にははっきりと見覚えがあった。川口直司。差出人の名前を確かめるまでもなかった。村尾と会ってから、四日経っている。その間、私はただ漠然とした予感のようなものだけを抱いていた。

ありきたりの時候の挨拶^{あいさつ}。内容といえば、近いうちに一度面会に来てくれないか、ということだけだった。たった便箋^{びんせん}一枚の、短い文面だ。

三度、読み返した。文面の裏側になにかあるのか、読み取ろうとした。電話が鳴ったのは、四度目を読みはじめた時だった。

「一緒に出したらしいな」

私は電話機の白い色に眼をやっていた。電話のむこうで、小畑はしばらく沈黙した。私は、声を出して手紙を読みあげた。

「まったく同じかね？」

宛名がちがっているだけだった。

「なにかあった、と思うしかないのかな」

小畑は返事をしなかった。とにかく会おう、と私は言った。御茶の水の喫茶店の名前を、小畑が言った。時間を言ったのは、私の方だった。

電話を切ると、封筒に書かれた丁寧な字を眺めた。読むというより、眺めるという感じだった。それから便箋を封筒に収^{しま}い、ちよつと考えて、バラ栽培法という本の間に挟んだ。

私が指定した時間まで、一時間もなかった。無意識のうちに、急ぐような気持ちになっていたらしい。ネクタイは締めず、ジャケットだけを着こんだ。車の鍵^{キー}を確かめる。

駐車場に人影はなかった。晴れた日で、茶色のボルボ二四〇は鈍い光を照り返していた。高田馬場から御茶の水へ、まずは十三間通りを直進すればいい。ドアミラーに、不審な車は映らなかった。気は緩めていない。時折スピードを落としてみるが、尾行車は確認できなかった。

地下鉄の江戸川橋まで来た。私は銀行のそばに車を止め、真直ぐ銀行の玄関に入ると、二分後に飛び出した。車には戻らず、いきなり地下鉄の階段を駆け降りる。切符も買わなければ、改札口も潜らなかった。そのまま、反対側の階段を駆け昇った。

車を出し、路地を縫った。尾行車はいない。間違いはなかった。

小畑はすでに来ていた。私を見つけて、軽く会釈をする。

「尾行^{つり}られてないだろうな？」

「村尾の旦那ですかい？」

「やっぱり、来たのかね？」

「いつまでたっても、変らねえ人だ。あれじゃ、死ぬまで変らねえでしょうね」

「老けてたな。四年前よりずっと」

「胃が悪いとか言っていました。俺より、三つぐらい上のはずです」

ガム抜きのアイスミルクを頼んだ。まだ正午前だが、駅前のお茶店は学生で結構混み合っていた。

「あと二年でしょう、残りの刑期は。うまくすると一年とちよつとで済むかもしれねえ」

「店、うまくいつてるそうだな」

「まあまあってとこです」

「川口には、なにかあった。われわれが知らんことだ。あいつが、ただ弱気になるとは、私にはどうしても思えんね」

「俺もです」

「手紙は、ずいぶん気を使って書いたようだ。それでも、村尾はちゃんと摺んだだろう」

「会いに行かなきゃなんねえでしょうね？」

「よほどのことだ。そう考えないわけにやいかんな」